

一般的信頼がリスク認知に及ぼす影響

—そして信頼から見る最適のリスクコミュニケーションとは—

The Effects of General Trust on Risk Perception

—And, what are the best risk communications seen from trust?—

宇田 和功

キーワード : 一般的信頼 リスク認知 知識量 whit-male 効果 リスクコミュニケーション
Keywords : general trust risk perception amount of knowledge white-male effect
risk communication

1. 問題

1.1. 一般的信頼 (general trust)

1.1.1. 信頼の解き放ち理論

信頼の解き放ち理論とは、社会的不確実性が大きな状況（取引相手の情報が必要とされながら、それが不足している状態）でも、コミットメント関係（特定の相手との関係を重視する取引関係）を形成するのではなく、より自分に適した相手との取引を行い、取引関係を拡張すべきであり、関係を外へ開く推進力（ブースター）となるのが「一般的信頼」であるという考え方である（山岸, 1998, 1999）。一般的信頼とは、他者一般の信頼性に対する「デフォルト推定値」である。つまり、相手に関する情報が全くない状況において、その相手がどの程度信頼できるかというものである。これを測定する目的で、Yamagishi & Yamagishi (1994) は一般的信頼尺度を作成した。

1.1.2. 一般的信頼と信頼性判断の正確さ

菊地ら (1997) は高信頼者が低信頼者に比べ、相手の行動を正確に判断していることが示されたとして、高信頼者は信頼性（ないしその欠如）を示唆する情報に敏感であるという小杉・山岸 (1995) の知見を更に一歩進め、高信頼者は相手の信頼性（ないしその欠如）を正確に判断することができる人間であると結論付けている。

1.1.3. 本研究における一般的信頼の定義

辻・針原 (2002)、木田ら (2003)、林 (2004)、

林・与謝野 (2004) の議論によると、従来の一般的信頼尺度では「人」を「他者一般」ではなく「知人」であると解釈されることもある。このことから、本研究においては、「他者一般に対するデフォルト推定値」として一般的信頼を測定するには、「他者一般」を想起させられるようにより具体的な表現法をとるべきであるという立場をとる。

1.2. リスク認知 (risk perception)

1.2.1. リスク認知とは

リスク認知 (risk perception) とはリスク (risk) を人がどう認識するかということを指し、客観的リスクを構成する程度や確率といったもの以外によっても大きく規定される（土田, 2000）。

また、Slovic (1987) は、このリスク認知が主として「恐ろしさ因子」「未知性因子」により構成されていることを見出している。

1.2.2. リスク認知に影響を与える要因

Flynn ら (1994) は白人男性が白人女性や非白人男女に比べ、危険度を低く評定するという white-male 効果を発見した。これは、先天的・生物学的要因による性差や人種差として生じているのではなく、社会的にリスクをコントロールし、その便益を享受できる立場にある人々が危険度を低くみなしたためであると解釈している。また、土田・伊藤 (2003) もまたリスク認知は便益性が大きく関わってなされるものであると述べている。

1.2.3. 信頼とリスク認知—Viklund (2003)

Viklund (2003) は、リスク認知に影響を与える要因として信頼を提案し、また知識量によっても影響される可能性のあることを示した。

1.2.4. 本研究におけるリスク認知の定義

本研究においては、Flynn ら (1994) が指摘するような便益性による影響を検討するため、危険性と便益性を分けて考えることにする。すなわち本研究では Slovic (1987) を始め、多くの研究者がとってきたようにリスクとは危険のことであるという立場を踏襲し、したがってリスク認知とは危険性認知と同義であると定義しておく。

1.3. 本研究の目的

1.3.1. 一般的信頼とリスク認知

Viklund (2003) による知見から一般的信頼とリスク認知との関係を見てみると、一般的信頼の高い高信頼者は低信頼者に比べ危険性を低く評定すると考えられ、また一般的信頼と知識量とをあわせてみた場合、知識量が少ない場合にその傾向が顕著に現れると考えることができる。

1.3.2. 一般的信頼と便益から見るリスク

Flynn ら (1994) や土田・伊藤 (2003) による議論と Viklund (2003) の結果を統合的に見ると、一般的信頼が高い場合には便益性による影響を受けないが、一般的信頼が低い場合は、便益性の影響を受けると考えられる。

1.3.3. 仮説と本研究の目的

本研究は以上の先行研究から得られた知見に基づいた以下の仮説を検証することである。

1. 高信頼者は低信頼者よりもリスクを低く認知するだろう。
2. その傾向は知識量が少ない場合に顕著に現れるだろう。

2. 方法

2.1. 質問項目

2.1.1. 一般的信頼尺度

辻・針原 (2002) の一般的信頼尺度を使用した。質問項目は、1. 私のよく知らないほとんどの人は基本的に正直である、2. 私は、私のよく知らない人を信頼するほうである、3. 私のよく知らないほとんどの人は基本的に善良で親切である、4. 私のよく知らないほとんどの人は信用できる。

2.1.2. 危険性認知・便益性認知・主観的知識

Finucane ら (2000) や土田・伊藤 (2003) を参考に 12 項目を危険性認知の対象項目とした。それらは、自動車、太陽光発電、水道水、クレジットカード、農薬、自然災害、お酒、原子力発電、タバコ、オートバイ・ミニバイク、飛行機、火力発電である。便益性認知と主観的知識量についても危険性認知と同様の項目を用いた。

2.1.3. フェース項目

フェース項目として性別、年齢等を尋ねた。

2.2. 調査の概要

2.2.1. 被験者・調査時期

関西大学社会学部産業心理学専攻の学生など 285 名 (男性 109 名、女性 176 名) を被験者とし、2004 年 10 月 4 日から 31 日にかけて、質問紙を授業内で配布したり、学内や食堂で配布したり、友人に配布を依頼するなどして実施した。

3. 結果

3.1. リスク認知への一般的信頼の影響

分散分析の結果、一般的信頼尺度得点の高低で危険性認知の評定に差がないことが示された ($F(1,283)=2.35, n.s.$)。

3.2. 一般的信頼と知識量による影響

分散分析の結果、知識量と一般的信頼との交互作用に有意傾向が見られ ($F(1,284)=3.24,$

p<.10)、下位検定により、一般的信頼が高く主観的知識量が少ない人は、危険性認知を低く評定していたことが示された (図 1)。

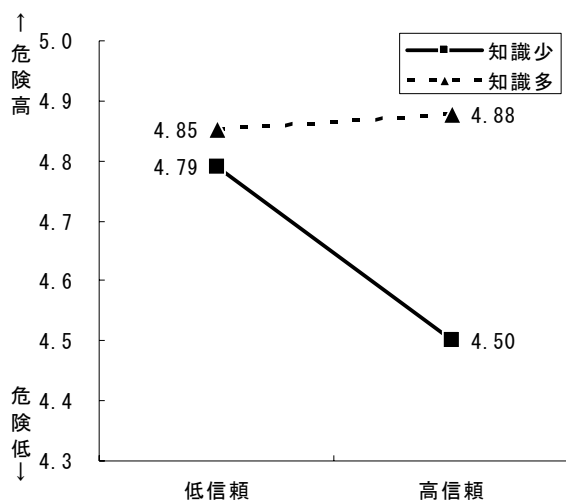


図 1：一般的信頼と主観的知識量による影響

3.3. 性別による危険性認知への影響

性別によるリスク認知への影響があるかを確かめるため、性別と一般的信頼の高低を独立変数とし、12の危険性認知項目に対する回答の平均値を従属変数として、二元配置の分散分析を行った結果、一般的信頼の主効果は見られなかった ($F(1,283)=1.50, n.s.$)。しかし、性別の主効果は有意であった ($F(1,283)=6.48, p<.05$)。また、一般的信頼と性別との交互作用は有意でなかった ($F(1,284)=1.556, n.s.$)。つまり、女性は男性よりも危険度を高く評定したことがわかった (図 2)。

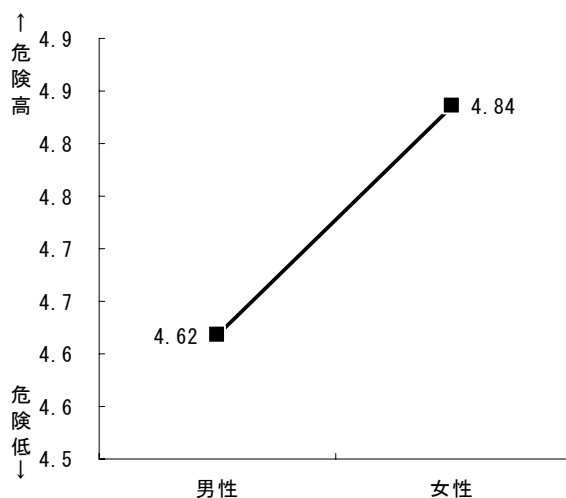


図 2：危険性認知における男女差

4. 考察

4.1. リスク事象一般における信頼の効果

リスク事象一般に対しては信頼単独による影響は見られず、これにより仮説 1 は棄却された。

4.2. 信頼と知識量との効果

一般的信頼と知識量がリスク事象一般に対する認知に及ぼす影響として考えられる可能性をまとめると次のようになる。

1 つは、他者一般を信頼していない人はリスク管理者や科学技術一般に信頼を置かないため、情報量に関わらず、それらを危険であると判断する傾向にある。

2 つめは、今回の調査では、リスク事象に対する知識がネガティブな情報に限定されていた可能性が高く、そう考えると、信頼感が高くても、ネガティブな情報が多いと感じていれば、科学技術一般が危険であると判断されるということである。これは、他者一般を信頼する傾向のある人はネガティブ情報に敏感に反応し、信頼に値しないと正確に判断できるとする、小杉・山岸 (1995) や菊地ら (1997) による説明と矛盾しない。

3 つめは、信頼感が高く、リスク事象に対する情報量が少ないと感じている場合には科学技術一般が相対的に危険でないと判断されるということである。これは、高信頼者は情報が少ない場合には他者を信頼するという山岸 (1998, 1999) による議論と矛盾せず、情報量が少ない場合 (社会的不確実性が存在する場合) に他者を信頼する傾向が強いことから、相対的に危険でないと判断したと言える。したがって、仮説 2 を全面的に支持することはなかったが、新たな知見を提供できたといえよう。

これらのことから、リスクコミュニケーションのあり方が見えてくるはずである。リスクコミュニケーションの際に、まず重要となってくるのは信頼感の醸成となってくる。そのためには、リスク管理者が十分に信頼に値するということを示さなければならない。しかし、このときに

注意しなければならないのは、醸成すべきものは「安心」ではなく「信頼」であるということである。つまり、たとえば事故が起きれば損害は金銭的に補償することを約束するだけでは信頼は生まれない。あるいは、住民との間にコミットメント関係、つまり強固な関係を形成することもまた望ましくないだろう。これは受け手が他と関係をもてないように、縛り付けることとなる。外部からの情報を遮断し、彼らを盲目にしてしまう可能性がある。そうすると少なくとも、そのコミットメント関係の外からは信頼に値すると評価されることが難しくなるかもしれない。そのように強固なコミットメント関係を形成することにより「安心」を築くのではなく、性格や人間性に根付いた「信頼」関係を築かなければならない。リスク管理者が、人間的に信頼できるということを示さなければならず、仮に人間的に信頼できない人物がリスクを管理しているのであれば、直ちに信頼できる人物に変えるべきであろう。すなわち、リスク管理だけでなくリスク管理者の管理にいたるまで、信頼できることを示さなければならない。そのためには、近接性 (proximity) の効果を応用するとよいだろう。近接性の効果とは遠くにいる人よりも、近くにいる人のほうが親しくなりやすくなるというもので (池上, 1998)、Festinger ら (1963) によって実証されている。そのように考えると、リスク管理者は住民らと幾度と無く意見交換の場を設け、お互いの距離を物理的・心理的に縮めてゆくことが重要となるだろう。

また、情報の伝達についても重要で、注意しなければならない。情報伝達の際には、ネガティブな情報だけでなく、ポジティブな情報も正確に伝達することはもちろんだが、この時に、「人間の心理的な作用として、ネガティブ情報が印象に残りやすいので、その点を理解した上で、正確に判断してください」というような内容を伝えて注意を促す必要があるだろう。そうすれば、選択的情報接触という心理的なバイアスによる誤差が削減され、根拠なく危険であると感じる人の割合を

下げることができるはずである。

このように、リスクコミュニケーションを行う際には、信頼感の醸成と情報伝達について慎重に進めてゆく必要性がありそうである。

4.3. リスク認知における性差

リスク事象一般に対して、男性よりも女性のほうが、そのリスクを高く評定したという結果から、女性はリスク事象一般に対して危険だと感じる傾向が強いということがわかる。このような性差は、これまで数多くの先行研究で確認されており、本研究においてもやはりその傾向が確認された。果たしてこの性差は、生物学的要因によるものであるのか、あるいは社会的要因によるものであるのか。このことは、中谷内 (2003) が指摘するように、必ずしも社会的要因だけで説明がつくものではなく、やはり生物学的要因によっても影響を受けている可能性が高いということではないだろうか。しかしながら、あえて1つの解答をあげるとするならば、女性と男性との身体能力の違いを提案したい。一般的に、男性は女性よりも身体能力に優れている。そのため、外敵による生命の危険にさらされても実力によりその危険を排除することができる。したがって、男性はさまざまな対象のリスクを低く認知するようになったのではなかろうか。これに対し、女性は身体的能力が男性よりも劣ることから、実力で外敵による生命の危険を排除することは困難なことから、危険なものであると感じたのではないだろうか。またこれは、Flynn ら (1994) が提案するような統制感による影響と矛盾していない。

このことに対する解答を得るための研究は当然必要になってくるだろう。生物学的な要因によるものであるとすれば、世界中のあらゆる人種・民族を対象とした調査・あるいは実験が必要となってくるのは当然であろう。また、ラットから比較的人間に近いとされる類人猿を用いた動物実験も画期的であるかもしれない。いずれにせよ性差は難しい問題であるので、包括的に性差を扱

った研究がなされ、明確な解答が得られるまでは、慎重に議論を進めてゆく必要があるだろう。

しかしながら、リスク認知における性差が物理的な身体能力に由来する統制能力であるということが正しいとするならば、リスクコミュニケーションにおいてこの性差を解決する筋道が開けることになるかもしれない。直接的ないし間接的にでも、一般市民がリスク管理に参画できるといふしくみを構築することによって、少なくともリスク管理においては一般市民にも統制能力があるということが意識される。そうすれば、この問題を解決する1つの糸口となるのではないだろうかと考えられるからである。例えば、リスク管理者を公選制にしたり情報開示の制度を簡略化し、より透明度の高いリスク管理体制を築いたりするなどである。このように民主的リスク管理体制が整い、リスク管理において十分な統制能力があるということを女性が認識すれば、女性だけが危険であると判断することは少なくなるかもしれない。

4.4. 総合考察—本研究における成果

以上のことに留意し、リスクコミュニケーションが行われれば、根拠なく危険であると感じる人の割合を下げることができ、結果としてリスクコミュニケーションを円滑に進めていくことができるはずである。しかしながら、本研究ではあくまでも大学生が対象であり、一般的な日本人を代表するサンプルとはいえない可能性も残ることから今後、信頼や知識量、便益性、性別などによるリスク認知への影響を検討する研究がなされ、本研究で得られた知見をさらに前進させる、あるいは建設的な議論がなされることを切に願う。

5. 引用文献

Festinger, L., Schacter, S., & Back, K. 1963 Social pressures in informal groups: A study of a housing community. Stanford University Press

Flynn, J., Slovic, P., Mertz, C. K. 1994 Gender, race, and perception of environmental health risk. *Risk analysis*,

14, 1101-1108

Finucane, M. L., Slovic, P., Mertz, C. K., Flynn, J., Satterfield, T. A. 2000 Gender, race, and perceived risk: the 'white male' effect *Health Risk & Society*, **2**, 159-172.

池上知子 1998 人間関係 池上知子・遠藤由美 グラフィック社会心理学, 175-198. サイエンス社

木田望・林直保子・与謝野有紀 2003 一般的信頼概念と測定の意味的セマンティクス: 一般的信頼感尺度における一般的他者の測定について 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 222-223.

菊地雅子・渡邊席子・山岸俊男 1997 他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼—実験研究 実験社会心理学研究, **37**, 23-26.

小杉素子・山岸俊男 1995 認知特性としての信頼 日本グループ・ダイナミクス学会第43回大会発表論文集, 150-151.

中谷内一也 2003 リスクは心の中でどうかたちづくられるか 環境リスク心理学, 83-110. ナカニシヤ出版

Slovic, P. 1986 Informing and educating the public about the risk. *Risk Analysis*, **6**, 403-415.

Slovic, P. 1987 Perception of risk. *Science*, **236**, 280-285.

土田昭司 2000 日本におけるゼロ・リスク認知: 研究の試み 関西大学社会学部紀要, **31**, 257-279.

土田昭司・伊藤誠宏 2003 若者の感性とリスク 北大路書房

辻竜平・針原素子 2002 都市と村落の社会的ネットワークと一般的信頼 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 114-115.

Viklund, J. M. 2003 Trust and Risk Perception in Western Europe: A Cross-National Study *Risk Analysis*, **23**, 727-738.

山岸俊男 1998 信頼の構造 東京大学出版会

山岸俊男 1999 安心社会から信頼社会へ 中央公論社

Yamagishi, T., Yamagishi, M. 1994 Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion*, **18**, 129-166.

林直保子 2004 社会関係と信頼: 安心は信頼を育むのか、それとも破壊するのか 関西大学社会学部紀要, **35**, 1-17.

林直保子・与謝野有紀 2004 一般的信頼と他者の想定—誰が誰を信頼するのか?— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 258.

[転載・引用をご希望の場合は必ず事前に下記までご連絡ください。]

著作責任者： 土田昭司 [関西大学]

連絡先： tsuchida@kansai-u.ac.jp

最終更新日： 2005年3月20日